

共同研究からNPO設立 そして次のステップへ

河合 剛太 特定非営利活動法人mRNAターゲット創薬研究機構・理事長／千葉工業大学先進工学部教授
中村 慎吾 特定非営利活動法人mRNAターゲット創薬研究機構・元理事

／株式会社 Veritas In Silico 代表取締役社長

司 会 松田 國博

2025年4月18日収録

松田 早速ですが、設立されたときの中村さんの関わり方と、その前後の河合さんと中村さんとの関係等についてお話をお伺いし、次に、設立したとき何を求めていたか、何がやりたかったか、また、中村さんが作られた Veritas In Silico (VIS) と NPO との関係、さらに、中村さんが NPO の活動を外から見てどう写ったか、そして、一緒に活動してきたなかで一番印象に残っていることなどをお聞かせください。

今後、河合さんは理事長を、中谷さんも副理事長を辞められ次のステップに進まれます。河合さんは独立して株式会社 Resorna を作られ、聞くところによると中谷さんも会社を作られるようですが、中村さんと河合さんと中谷さんの3人は、今後NPOとどう関わっていられるのでしょうか。

河合 僕としても、中村さんが外から見ていてNPOがどう写っていたか、中村さんにとってどんなメリットがあったかは興味深いところです。

設立前後の 関係

中村 NPO の設立は自然な流れだった気がします。その前段階として、河合さんが2011年4月から私学助成(正式名称「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」)で『長

鎖RNAの機能構造を発見するための技術基盤の開発とその応用』の研究代表者を務められ、それを発展させ、千葉工大という地の利をうまく組み合わせてNPOを設立されました。私学助成で何人かと共同研究していたことや、NPOが早期に認定される環境があった一方で、底上げをしないといけないという使命感もあって結実したのがNPOだと思います。すごく地に足がついた自然な流れかと思っています。

それと足並みをそろえて、中谷さんが阪大の産業科学研究所で独自に核酸標的低分子創薬研究会を立ち上げられました。東と西で底上げ的な組織ができたことは、時代の特徴だったと思います。

松田 中村さんのおかげで企業との繋がりがもができたとのことですが。

中村 やっぱ面白い時期だったんだと思います。僕らとmRNA標的低分子創薬の共同研究をして、僕らから話を聞くばかりではいけないと思ったのか、共同研究している人がNPOに入会された感じがします。最初の賛助会員の三菱ガス化学株式会社は、うちのVISにも出資してmRNAをターゲットとした創薬を意識していました。同様に、パートナーの武田薬品工業株式会社、塩野義製薬株式会社も入会されました。製薬会社側からすると、中立の意見を聞ける場だったのかなと思います。とはいえ、中谷さんも河合

さんもVISの顧問を務めていたただいていたので、ズブズブと言えばズブズブですが、そこは節度あるかたちでやっていました。

日本における mRNA ターゲット創薬研究と現状

松田 mRNA をターゲットとした創薬をという動きへの普及に、NPO はどのような影響を及ぼしたのでしょうか。

中村 ガートナーのハイプサイクルってご存知ですか。何か新しい技術ができたとき、ギューッと期待が伸びて上がっていき、すごく上がったところで、何でもかんでもいいわけではないと思うようになって、今度は期待がビューと落下し、その後、地道な研究が積み重なって行って、ある程度まで持ち直して正しい評価に落ち着くという流れです。これまでの状況は、まずは大きく期待を盛り上げていこうという段階でした。1回ぐっと盛り上げるところがないと、ただ凹むだけです。欧米等に負けなにかたちで大きく盛り上がったのは、NPOのおかげだと思います。

河合 自然な流れと言えばそうですね。僕自身は、中村さんと相当前からこの分野の共同研究をしていて、重要だと思っていましたが、なかに入ると、みんなの期待がどうなっていたかよくわかっていませんでした。中村さんは、肌で製薬企業の動向を感じていたと思いますが、NPOを設立した当初、入会した人たちの話を聞いているだけで、何か盛り上がっていると思っているだけでした。ただし、製薬会社の多くの人がどう考えているかわからなかったのが、今どうなっているかピンときませんでした。

中村 なるほど。僕は秘密保持契約を結んだうえで製薬会社と腹を割って話をするようにしていました。初期には飛びつく方

もいましたし、本気でmRNAを標的とした創薬にいち早く取り組もうと考えていた製薬企業がいる一方で、その他の一群は、興味はあるけどもう少し待ってみようと考えていたんです。極端なことを言うと、薬が開発されて市場に出るのを見届けてから始めても遅くないと考えている様子見です。

たいていの普通の薬も低分子であって、mRNAを標的としたところで低分子の特性は大きく変わらないとわかっている人は始めていました。その一方で、社内で説明するのが面倒くさいので、成功例が出るまで待つという一群が、日本に限らずいました。具体的に損得勘定を踏まえて、見ている人たちがいた感じです。飛びつくぞという人たちの一群はほぼ飛びついて、今盛り下がっているとは言いませんが、ちょっと風の子です。

松田 製薬企業に近い中村さんの感覚は、すごく貴重ですね。

日本が先駆けてやる チャンスはあった

中村 この風の子の時期で、NPOなどで知識を仕入れようとしてる人と、何もしてない人がいます。

日本ってすごく珍しい土地だと思うんです。たとえば、薬を開発する人、製造する人、お医者さんなど、ある程度信用のできる医薬品周りの人たちが割と同じタイムゾーンに固まっていて、新幹線を使えば全員に会える国は世界的にないと思います。アメリカでは簡単に全員が集まらないし、信用できるのかというと、変な人も多い。その意味で、日本はみんなで何かやるとき、もっとざっくばらんにできるはずなんです。

また、たいていの文化圏では、宗教を通じて、何か信じて思い込むこと・その他のことを信じないことを小さい頃から訓練していま

す。それに比べると、日本人はいい意味で無宗教で、個人個人は一つの意見に固執せず割と柔軟で何でもできるはずです。しかし、社会システムか何かのせいで、集団となるとかたくなになる部分があるのは残念です。集団となっても、意見の違いを踏み越えたり、同じ意見を持つ小集団で自由に活動できるかというと思いますね。

話が飛びますが、世界に広げていくには、押し付けることが重要です。世界の人たちのニーズを聞く必要はまったくない。iPhoneを作るとき、アップルは世界に「これいる？」って聞かず、勝手に作りました。日本に強力な押し付ける力があったら、ガラケーが世界を制したと思います。その意味で言うと、mRNA ターゲット創薬も、個人個人の力や小集団に頼って早く始めて、世界に押し付けていくチャンスだったと、僕は今も信じています。力足らずでまだ押し付けきれてない感じがします。

松田 先日、日経に、日本は創薬に金をかけているのに全然ものにならなかったといった記事あり、その最後に、始めるのが遅かった、と書かれていました。

中村 そうだと思います。ずっと遅れて始めてます。先にある程度のもがあるのと、それを越さなければならぬのでハードルが上がるんです。

あと、平等にすることを考えないことだと思います。投資の世界では、ある会社に投資する場合、こっちにも投資したらという議論が出ますが、1社だけに投資することがよくあります。コロナ禍の時にワクチンについて日本で4社に平たく資金を拠出したのが果たしてよかったか。僕からすると、この学びは、ここで辞めることなく、次のコロナが出たときのために備えておくべきです。失敗したからやらないとなるのはどうかと思います。

NPOとVIS、 製薬会社の関係

松田 中村さんとしては、NPOとの関わりが役に立ったという感じでしょうか。

中村 どちらかと言うと、僕は中谷さんや河合さんと志が同じで意識が近すぎ、途中から距離を置いた感じです。それくらい意識として近いものがありましたので、実際、僕らと共同研究をしていたパートナーもNPOにはあって、底上げ的なところで知識をつけていただいたので、当社としてもパートナーさんとすごくやりやすくなりました。加えて、河合さんの卒業生がVISに就職されました。その意味で、すごくよい関係を持たせていただきました。

一方で、関係が強すぎると思われたのか、製薬協のプロジェクトに呼んでいただけなかったのは残念ですが。

松田 今のお話について河合さんはどうですか。

河合 AMEDのプロジェクトは、製薬協のなかにできたコンソーシアムのようなところの人たちが中心になって、経済産業省にロビー活動をして実現しました。そこにVISを入れるかどうかを、僕は考えたことがありません。製薬協側からそういう提案もなく進みました。あえて外すといった意識もありませんでしたが、はいいっていないことは事実です。

AMEDの成果を どう活かしていくか

河合 AMEDのプロジェクトでの懸案事項は、今年5年目で、僕も中谷さんも大学からいなくなりプロジェクトは終わりますが、データをどうするかという話で、中村さんに全部渡して解析してもらったら役に立つ

のではと話していたくらいです。

中村 中谷さんは、他人に使ってもらより、自分でプログラムを書いてデータ処理をすると、何かに書いていました。そこで、当社が支援するので、うちのコンピュータを使って、VISのデータもまとめて処理しませんかという話をしています。そういう合流も、新しいご退職後のあり方だと。

河合 そのためには、AMEDで一緒に研究していた製薬企業がすべてOKを出す必要があります。オールジャパンで、それこそVISとそれ以外の企業との垣根を取り払って、みんなで一つのスタンダードを作ろうと思えばできると思うのですが。

中村 そうしていただくとありがたい。それを最初から世界全体に見せるのはどうかと思います。なぜ、日本の税金を使って得たものを、まず日本企業に公開するのが駄目なのでしょうか。

河合 日本の枠組みで、もう1度再編集すればよく、そこにNPOが関わるかどうかはわかりませんが、中村さんを入れないとデータが生きないという議論を中谷さんとしています。

中村 そう思ってもらってありがたいございます。

RNA創薬研究者が集まる ハブができていた

松田 話を戻しますが、それぞれ個性の違う3人がRNAターゲット創薬で集まったことは大きいですね。ここまで、どなたの役割が大きかったのでしょうか。

河合 中村さんがハブになっていたからですよ。

中村 僕が武田薬品工業にいたとき、会社のお金と自由度を持たせていただいていたので、河合さんや中谷さん、他の方にも



お声掛けして共同研究をやっていました。そして、武田はやる気さえあればちょっと無茶ができる会社でしたので、まったく、新しいアイデアを出すためにはこれまでにない環境を用意しなければならないということを言い訳に、ワインとチーズがなければ駄目だとか言って、会社のお金でワインとチーズを買って来て、就業時間内にワインを飲みながら先生たちとディスカッションをしていた気がします。

河合 つくばでしたかね。

中村 つくばだったか、大阪の十三だったか。河合さんと中谷さんにも来ていただいた。

松田 それが今の日本のRNAターゲット創薬の核になったのですね。

河合 中村さんのところに人が集まってNPOができ、中村さんはVISを作られた。

自由になり 次なるステップへ

中村 今から考えれば、NPO や中谷さんの勉強会が始まる前は、AMED の研究費などが全然取れなくて、「くっそう」とか「何でわかんないんだ」とか言いながら新地で飲んだりしていました。それが今こうやって盛り上がっているのを見ると、NPO に協力させていただくのは楽しかったし、面白かったと思います。ただし、先生方はまだまだお若いので、ここに区切りをつけるのは嫌ですね。

河合 NPO に関しては次の世代に替わればよいのであって、僕も中谷さんもここで研究をやめることは考えていません。

中村 ここで転機があるのではと思っていましたが、それを軽妙に、新たな自由を得る機会だと捉えていらっしゃるとは、お見それしました。

河合 中谷さんはスタートアップをやろうと言っていますし、僕は地道な仕事をやって、協力することを考えていくということです。

中村 スタートアップを始めて会社を成長させるのは大変つらいので、それを皆さんが始めるべきだとは、僕は到底思いません。何か違う方法で、ご一緒したいと思います。

NPO からの スピンアウト

松田 ここで NPO の理事長、副理事長が替わりますが、河合さんと中谷さんはそれぞれ会社を作られて区切りをつけ、次は中村さんと一緒に発展させると。そこに NPO を絡めていけると、展開としては面白いですね。

中村 僕からすると、3 人とも独立していたのがよかったと思います。誰かの、助教授、部下とか門下生だと、どうしても偏る可能性がある。全然バラバラということはありますが、それぞれの分野で研究していたのがよかった。今後、河合さんの会社とも契約させていただくことになると思いますが、力関係が僕のほうが強くなるのはまずいと思うので、いいバランスになるように組ませていただこうと思っています。

松田 NPO から新たに会社が育つのは大きな成果だと思います。それぞれが会社を持つということは、創薬の期待が広がったと考えてよいのでしょうか。

中村 河合さんがやられていること、今後やろうとしていることはある程度理解していますが、中谷さんがどこまでお考えなのか存じ上げないのではっきりこうだとは言えません。ですが、依然として RNA を研究している研究者は製薬会社にほとんどいません。ですから、RNA をよく知った方のサポートは必要です。その意味で言うと、RNA に関連する事業というかビジネスは、まだまだ発展すると思います。今後、製薬会社から RNA 向けのものが出てくるなどの発展がありますが、爆発的に広がるのはもう少し先かと思います。

松田 NPO は、底辺というか、情報を公開して少しずつ世の中の動きを醸成していったと。

中村 あとは火を絶やさないことだと思います。

アカデミアの RNA 研究者の系譜

松田 河合さん、以前『機能性 Non-coding RNA』の本を作った頃の研究者は、創薬へ向かわなかったのでしょうか。

河合 そんなことないと思います。RNA の基礎研究をしていた人たちはそのまま研究していると思いますが、RNA が創薬のターゲットになることをぼちぼち認識したと思います。たとえば、ncRNA の第一人者の廣瀬さんは、中谷さんのプロジェクトにはいつて *in vitro* とか細胞での検証を担当しています。あの本を書いていた頃にいつも参加していた浜田道昭さんは、現在、RNA のインフォマティックの大家みたいになって多くのプロジェクトを抱えていますし、NPO の理事に就かれています。何人かはこの分野に流れて来ています。

中村 アカデミアで RNA の研究者はすごく増えましたね。

松田 15、16 年前、ワトソンとスタイツを一緒に呼んだとき、スタイツから RNA が変な働きをしているという話を聞きました。その後、河合さんが ncRNA の本を書かれ、その後しばらくしてモデルナから創薬の話が出てきて、大きな流れを感じました。サイエンスの歴史からすると、創薬まで結びついた期間はすごく短いように思えますが、どうでしょう。

中村 1970 年代に抗体が薬になるんじゃないかと言われ始めてから、最初の薬が出るのに 30 年ほどかかっています。核酸医薬もそれぐらいかかっています。mRNA に対して低分子という概念が出てきたのは、僕が最初にやっていた 2004 年か 2005 年頃です。そこから 20 年でここまで来て、あと数年で一つくらい市場に出ていくものができるかという状況だと、同じか少し早いと思います。

これに関して言うと、廣瀬さんは僕がイェール大学にいたときの知り合いですから、すごく狭い世界です。RNA に関する低分子創薬のセミナーで、僕と廣瀬さんと浜田さんと、もう 1 人の 4 人で講演をしました。10 年

ほどたつて、同じセミナーがあったとき、1 人脱落して 3 人プラス別の人でしたので、「脱落しなくてよかったね」と言いあったことがありました。逆に言うと、あまり広がらず、ずっと前からやっている人たちが続けているという感じがします。

松田 大学の方は 35 歳か 36 歳で教室を持って独立したら、30 年たつとみんな定年を迎えますね。

中村 浜田さんは僕よりだいぶ若いと思いますが、廣瀬さんは同じか少し上です。会社の場合、定年はあるような感じなので、もう少し続けてほしいですね。

NPO が若い研究者へ与えた影響

松田 いろいろな方々が中村さんのプラットフォームに集まったことが、一番の強みになっていたようですね。

中村 僕はお引き合わせをしたくらいです。今ふと思ったんですが、みんな同じような意思を持って別々にやっていたという意味では、明治維新に近い感じですね。別々の藩にいて、別々に活動していた人たちがある時にそろって、大きなうねりになった。その一つが NPO だったと思います。NPO は新政府なのかもしれないので、続いていくと思います。

松田 NPO は集まる場を提供してきたと。

中村 企業の方でも個人として入会できたので、お金の集まりは悪かったかもしれませんが、上の人まで動くことができなかったかもしれませんが、若い方に門戸を開いたと思います。

松田 河合さんは最初から講演会などをやっていて、若い人たちの反応をどう感じていましたか。

河合 製薬会社の現場の方でも個人の資格

で入会されていた人たちは、この分野を見捨てておけないと多分思っていて、講演会後の飲み会では、製薬会社の垣根がほとんどなく、みんなざっくばらんに話し合っていたので、刺激になっていたと思います。

松田 NPOは、若い人たちに集まりの場、勉強の場を提供したと。

中村 そうだと思います。創薬をやりたい製薬会社は賛助会員としてNPOに入会され、それ以外の会社でやりたいという気持ちを持っている個人が集まったというかたちです。製薬会社から個人会員として入会されている方は、今はタッチできなくても、数年していくつかの薬が臨床入りするなどの流れのなかで所属企業がやるぞとなったとき、旗振り役になれるように、もしかすると今成長中なのかもしれません。

松田 河合先生のアカデミアとしても、NPOの狙いはよかったわけですね。

次の役割は 人材育成

河合 アカデミアとしてメリットを目指していたわけではない。基本的には、アカデミアの技術を、いかに企業に伝えて使ってもらい、この分野を活性化することを目的にやってきました。今でもそう思っています。

松田 そこに人材育成、若手の教育が加わった。

河合 最初からそこまで考えていたわけではありません。僕と中谷さんは、最初の頃、「なんでたった30万円の賛助会員の年会費を、どの会社も払えないんだ」と文句を言っていたくらいです。結果的には意欲のある製薬企業の現場の若い方々が入会され、情報収集して帰っていき、会社にフィードバックすることがうまくできていたのだと思います。

松田 それは若い人に与えた影響ですね。河合さんと中谷さんが受けた影響は、中村さんの姿を見てそれぞれ独立して会社を作り、次のスタートを切るということでしょうか。

河合 会社を作ることにに関して言うと、中村さんの影響力が強かった。作ればいいと思いました。ただし、中村さんは用意周到、絵に描いたような作り方をされていて、それは真似できないと思いましたが、同じことをやる必要はなく、自分は自分なりのプランで作ってやっていけばよいと思っています。重要な手本になったことは確かですが。

中村 先生方の選択肢に加えていただくための、布石ぐらいにはなったという感じですね。

中村さんから見た NPOの活動

松田 中村さんは設立から関わっていて、NPOのこの8年間をどうお感じですか。

中村 僕はある意味で近すぎたので、NPOの中立性とかを意識して、影響力を持ちすぎないように、あえて引きました。2020年には理事も辞めました。ただし、VISの誰かが理事になってもいいとは思っています。

と言いながら、困ったなと思っているのが、さっき言われた年会費です。30万円が払えない会社の一つがVISです。すみません。

新しい NPOの姿

松田 今度、新しい執行部に移行しますが、今のNPOの延長線上でいけば、中村さんの会社と繋がっていくと考えてよいのでしょうか。

中村 最低でも今のかたちでは繋がります。でも、河合さんと中谷さんの舵がなくなったとき、僕が出すぎると私物化っぽいので、それは考えていません。でも、次に切り仕切る方も当然存じ上げているので、支援していこうと思います。

河合 僕も中谷さんも理事としては残りませんが、運営の中心にはなりません。サポートする立場になると思います。

中村 NPO が育つには、発展的になっていくほうがよい。違う方に替わられるのは素晴らしい判断だと思います。

松田 このまま消えてしまうのはもったいないとすると、どのようなかたちにすれば面白くなるのでしょうか。ざっくばらんにいろいろ話ができるような場所にするという選択肢もあると思います。

中村 NPO は学会とは違います。もともと予算を取ろうとしていました。予算を持ったうえで、たとえば、必要な研究をNPO にはいつている方にしてもらうことも考えていたので、そういう方向性になっていくものありかと思います。

河合 最初、賛助会員にたくさんはいてもらって少し動かして、それをネタに外部資金を取りにいくといったイメージでした。その段階では、僕もNMR測定をやっていましたし、近藤さんも結晶化をやっていましたが、その先になかなか進めなかった。実績がないと、申請書とかを書いてもらうところまでいかないのが実状です。僕自身は理事長をやっていて、なおかつ自分で実験をやって出すことが、利益相反とは言わなくても、やりにくい面がありました。

今度、理事長ではなくなるので、僕の会社でこういうことをいくらで請け負ってやります、といった提案ができます。そういうのをうまく束ねて、AMED などから研究費を取することは不可能ではない気がします。

中村 新しい執行部で、新しい方向性が出てもいいかもしれませんね。それこそ、クラウドファンディングとかをやっても面白いと思います。

NPO による 新しいデータの扱い方

河合 これからの人たちに時々、何か予算を取りにいったらいいんじゃないと言っています。そのとき、どういう題材でやるのかが、いつも問題になります。結局、製薬会社は自分のネタを出したりしません。そうすると、ありきたりのネタというか、誰でも知っているネタから選ばなければならない、それで申請書が書けるかというジレンマがあります。

中村 実際の話、お金よりもデータがほしいじゃないですか。データを取るためにお金を使う。製薬会社がデータを出してくれるのが本当はいいと思います。NPO にデータを出して、出したデータは会員だけ見れるが、外に出しては駄目という仕組みがあるといいんですけどね。

河合 中谷さんがAMED のプロジェクトで取ったものすごい量のデータを、NPO で共有するとかができたらいいいと思います。

中村 個人で共有するのではなく、賛助会員はそれを計算して自社のために使ってもいいし、NPO に結果を出しても面白いと思うんですよ。実際に似たような例があります。

今化合物ライブラリーを各製薬会社は持っていますが、それを自社で管理するのではなく、ある会社に委託しています。この会社に複数の製薬企業がライブラリーの管理を委託しているだけではなく、相互利用することが個別に始まっています。データをみんなで入



れて共同利用するような感じです。そのようなことは、一つの受け皿になると思います。

どこまでお話ししていいかわかりませんが、ある化合物ライブラリーを管理する会社に、知っている限り3社が預けています。この3社のなかでは共通に使って、うまくいった場合、これこれこうするといった取り決めをしています。そのようなものがあると、共同で本気の何かをやるという意識が育ちます。データを入れたことをきっかけとして、共同で何かをやるという土台になると思います。すると、第2期NPOの発展は、お金とともにデータをみんなでプールしてもいいかもしれない。そうしたら我々も提出します。

今一番印象に残っていることは、 設立時

松田 この8年間一緒にやってきて、若手もそれなりに育ってきているので、創薬というコンセンサスは得られたような感じがするのですが。

河合 集まった人たちはそのつもりで来ているから、コンセンサスはもちろんあると思います。若手が育ったかと言うと、どうでしょうか。



製薬企業の方を含めて次のNPOの執行部は若手で組織されるので、自分たちで運営していくことで育っていくのではないのでしょうか。僕らは取り巻きのような感じで、いろいろなことを提案して、若い人たちがトライアルして活性化していったらいい。

松田 最後に、このNPOで一番印象に残っていることは、どんなことですか。

中村 いろいろありますが、事務所をどこに置くかも含めて、やっぱり最初のところですかね。河合さんが不慣れなところを進まれるなかで、実際に助けてくれた石黒周さんや、今もお手伝いしてくれている事務局の田村さん、また千葉市からのご支援とかがうまく集積した感じがします。社会というか流れに乗った。立ち上げて最初の講演会でお話しさせていただいたことは幸運でした。僕は十分には協力できませんでしたが、やっぱり印象に残っています。

松田 話を聞いていて、ゼロから作ったのではなく、それぞれに核があって、それをうまくまとめられてこのNPOができたという感じですね。

中村 今、風潮的にベンチャーを作れ、ベンチャーを作れみたいな感じがありますが、それあんまり好きじゃない。ベンチャー

ーを作るところがゴールになっている。ベンチャーを作るということは、いずれはその9割以上を潰すわけです。その覚悟が経産省や文科省にあるのかと思います。そのなかで、研究室の研究周りがNPOに昇華していくという新しいスタイル自体は産業に繋がりにくのですが、底上げが必要だという社会的な要請をうまく捉えたと思います。一つの新しいやり方だと思います。印象的でしたね。

河合 最初、僕は走っている感じでした。とにかく、何かを始めなきゃいけないけど、予算が取れないなかで、たまたま Robo Cup で優勝するためにNPO法人を設立していた石黒周さんから、NPO でいいんじゃないと言われて、中村さんの人脈などを使い、産業革新機構までいって打ち合わせをしたら、運良く千葉市がサポートしてくれることがわかって設立できた。走っただけでしたが面白かったですね。

設立してからは、製薬企業の現場で創薬をしている人たちと直接お話しができたことが、よかった。それが今の自分の会社に繋がっていると思います。

松田 学会や大学の研究所とは違った感覚の刺激を受けたということですか。

河合 学会ではそういう話にならないでしょうね。

松田 その意味でも、狙いにはまったと。

河合 そうですね。我々の技術が役立つのだということの実感を得たみたいなの。

中村 実際に大きくなってくると、あそこはうちの敵だから話をしないとか出てきますが、学会ができたばかりだったり、できる前は、みんな仲良しです。その頃が一番楽しいんですよ。誰もやってないから、みんなでやらないと駄目だ、みんな協力していくみたいな感じ。情報も公開しようという感じなんです。同じようなことをやっておられる方がもっと増えてくると、あそこは敵だから話をしないとか、顔を隠してポスターを見にいけないといった話になるんです。このNPOは、心情的にというかメンタル的、スピリットの繋がっていた感じがします。勝手によそから見ていると。

松田 これが一番いい言葉じゃないかな。

お忙しいところお時間をいただき申し訳ございません。ありがとうございます。㊦